

食と旅 火

ふるさと 水

アート 金

得する 土

# ぐるっと東日本

## 母校をたずねる

# 高2春、寄席にはまる

### 落語家 春風亭一之輔さん =1995年度卒

## 埼玉県立春日部高

6

本業の高座はもちろん、ラジオのレギュラー番組、新聞や雑誌の連載など、ひっぱりだこの人気落語家、春風亭一之輔さん(43)は1995年度卒。埼玉県立春日部高時代、1年続けた運動部をやめ、ふらふらと遊びに行った東京・浅草の寄席で落語にはまりました。登場人物の「いいかげんさ」にひかれたといいます。

【萩原佳孝】

中学ではバスケット部だったのですが、何か高校から始められる部活動がいいなと思って、ラグビー部に入りました。でも集団で何かするというのが、自分には全く向いていなかったんですよ。1年やりましたけど、つまらなくなってやめました。仲間が自宅まで熱心に引き留めに来てくれましたが……。

部活をやめてすることも無いし、2年生のゴールデンウィークだったと思いますが、一人で浅草にふらふら遊びに行ったら、浅草演芸ホールがあった。生まれて初めて、生で落語を聞きました。それからですね。

当時、春高には落語研究部がありました。部員は少なからず部室だけでした。「やりたいな」と思って担任の先生に相談したら「いいんじゃない」と言われ、隣の席の友達を無理に引き込みました。活動と言っても、ぼくが落語を覚えてその友達が聴くだけです。6畳くらいの狭い部室で、奥の高座に大きな座布団が敷かれていて「稽古」はそこでやっていました。

部室には、昔の先輩が残っていたテープや本があったし、春日部の市立図書館は落語のテープがそろっていたので、借りてきては覚えました。月1、2回は

寄席にも通い、春高祭では「時そば」なんかを演じたと思います。

3年になると、佐野君(劇団東京ミルクホール主宰の佐野バビ市さん)ら1年生が入ってきました。同級生で、クイズ作家に

の独演会など年間数百もの高座に上がる。新型コロナウイルスで寄席が休演になった20年4月にはYouTubeに「春風亭一之輔チャンネル」を開設。10日連続で高座を生配信する試みも。

しゅんぷうてい・いちのすけ 1978年、千葉県野田市生まれ。2001年、春風亭一朝師匠に入門し、12年に21人抜きで真打ちに昇進した。文化庁芸術祭新人賞など受賞も多数。「定席」といわれる東京都内の寄席に加え、地方で



＝東京都千代田区で、宮本明登撮影

## 「文武両道」実践 部活加入率98%



春高祭での演技披露「臍脂の集い」。応援指導部にとって1年間の集大成となる一春日部高校同窓会提供

なった矢野了平君らも出入りして、部室にはいつも4、5人いました。といっても、ダベって時間をつぶすのが目的なので、バカなことがかりやっていました。

勉強はほとんどしませんでした。大学受験に全部落ちて、浪人するくらいだったから落語家になろうと親に言ったら「そんな軽い気持ちじゃダメだろ」と反対されました。当たり前ですよ。それほど甘いものじゃない。今思えばあの時ならなくてよかったですよ。

1浪して、ラジオ番組の制作をやりたいと日大芸術学部に行きましたが、落語

研究会に入って、また落語を覚えました。

就職活動は一切なかったし、他にできることもない。じゃあ落語家だつて。大学を卒業し5月に春風亭一朝師匠に弟子入りしました。

ラグビーやめて落語を好きになった高2の春はとて大きかったと思います。あのまま続けていたら絶対、落語家にはなっていなかったし、落語も好きにならなかつたでしょう。

部の先輩や仲間には申し訳ないと思っていますし、こういうのを読まれちゃうと恥ずかしいんですけどね。

本当につらかったら、やめちゃう方が早い。それまでは、いいかげんさがなくて頑張れば何とかなると思っていました。でも頑張っても、どうにもならないことがあります。辛抱がうまくいけば美談になりますけど、そうじゃなければ、ただの痩せ我慢です。

つきものが落ちたようになり、出合ったのが落語でした。落語って、いいかげんな人しか出てこない。うまくいかなないとダメな人ばかりです。当時の心境を考えると、そういうこともうまく作用したのかもかもしれません。

「文武両道」を教育方針に掲げる春日部高には運動部17、文化部21、同好会と愛好会が各1あり、生徒加入率は98% (兼部を含む) と非常に高い。

陸上競技部は1918 (大正7) 年の創部以来、10人の全国大会優勝者を輩出し、今も多くの大会で好成績を残している。「創部百周年記念誌」には歴代の部員1067人の個人記録の一覧がまとめられている。92年アルペールヒル冬季五輪スピードスケート銅メダリストの宮部行範さん(故人)も同

部の出身だ。

応援指導部は春高生・OBの団結の象徴として存在感を発揮している。入学式での校歌指導、野球部などの試合応援、春高祭(6月)では演技披露「臍脂の集い」を開く。県内の伝統校6校の応援団が集う発表会「日輪の下」(2月)にも参加する。コロナ禍で活動は制限されているが、第95代団長の江草浩真さん(3年)は「厳しい状況下、できることを模索して活動していきます。この試練も得難い経験です」と話す。

文化部の活躍もめざましい。

将棋部は2020年の全国高校将棋選手権大会個人戦で出場資格を獲得(大会はコロナで中止)。書道部も20年の全国高校総合文化祭書道部門に出席した。

英語部は3月、オンライン開催となったウインターカップ全国高校生英語ディベート大会で準優勝を果たした。生物部も3月の日本生態学会高校生ポスター発表会で審査員特別賞を受賞している。

次回(26日)に掲載